12 月第 1 週の礼拝説教

■日　時：2023 年 12 月 3 日（日）10：30～11：30　待降節第 1 主日
■説　教：　保科けい子牧師
■説教題：「 メシアが来られるときは 」
■聖　書　新約：ヨハネによる福音書 7 章 25～31 節（新約 p178～179）
■讃美歌：7「 ほめたたえよ、力強き主を。」
　　229「 いま来たりませ、救いの主イエス、」

本日から主イエスの御降誕を待ち望む待降節になります。立川教会の庭も先週の礼拝後に取り付けをしていただいたので、夕方から早朝にかけて、イルミネーションが美しく輝いています。今年は写真を撮ろうと思いましたが、点滅しているのでうまくいきませんでした。また、先週の月曜日の夜に立川駅の北口に行きましたら、LEDのブルーライトで飾り付けられた幻想的な光景が広がっていました。かつて住んでいた仙台でも、この時期には定禅寺通りを中心に「光のページェント」と名付けられて、ケヤキ並木などがライトアップされるので、全国から観光客が集まっていたことを思い出しました。

さて、本日はヨハネによる福音書の7章の25節から31節をご一緒に読んでいきたいと思います。しかし、ヨハネによる福音書には待降節や降誕日にふさわしいいわゆるクリスマス物語が記されていないのです。東の方の占星術の学者たちも羊飼いも天の大軍や賛美する天使たちも登場しません。けれども、当時の人々が大きな期待を抱いて、救い主、すなわちメシアが地上に現われるのを待ち望んでいたことを記しています。その一つの箇所がこの7章25節から31節なのです。人々は、メシアは奇跡を伴って輝いて天から華やかに登場する､つまり劇的に自分たちの目の前に現れると考えていたのでしょう。しかし、主イエスはそのようにして人々の前に現われたのではありませんでした。それは、主イエスの誕生に際して様々な奇跡が語られている、他の福音書の記事でも同じです。主イエスの生まれたのは家畜小屋です。田舎の大工の息子として、ふつうの人間の子として生まれてきたのです。当時の人々が抱いていた栄光のメシアのイメージと、そのような人々の日常生活の中に現われた救い主というギャップが、本日の箇所では鋭く描かれています。そのことはまた、まばゆいばかりの幻想的なイルミネーションが描き出す華やかなクリスマスと、暗闇に覆われた世界にかすかな希望の光が与えられるようにと私たちが願うクリスマスとのギャップをも考えさせられるところです。

ところで、ヨハネによる福音書第 7 章には、ユダヤ人の大きな祭の一つである仮庵祭の時に主イエスがエルサレムに上り、神殿の境内で人々に教えを語ったことが記されています。神による救いの到来を告げ病人を癒すなどの奇跡を行っていた主イエスのこと

は、当時の人々に次第に知られるようになっていました。ですから、この人こそ、預言者たちがその到来を告げていた救い主、メシアなのではないか、という期待を抱いている人たちもいました。けれども、主イエスは律法で禁じられている安息日にも癒しを行っていましたし、神をご自分の父と呼び自分は神の子であると言っていました。ある人たちにとっては、人間が自分を神の子だと言うのは神を冒涜することに他ならず、そのように語るイエスという男は神に背く教えを語って人々を惑わしているから生かしておけない、と憤りの対象になったのです。そのように主イエスについての様々なうわさや憶測が飛び交っている中、エルサレムに来たイエスという男が神殿で何を語るのかは大いに注目されていたのです。

本日の箇所の 25 節 26 節に、エルサレムの人々の中には主イエスについてこのように言っている人たちがいたと語られています。「**これは、人々が殺そうとねらっている者ではないか。あんなに公然と話しているのに、何も言われない。議員たちは、この人がメシアだということを、本当に認めたのではなかろうか**」。この人たちは、ユダヤ人たち、特にファリサイ派の人々や律法学者たちが主イエスを殺そうとねらっていることを知っていました。それは先ほども言いましたように、主イエスが安息日の掟を破り、さらには神を父と呼んだからです。しかし一方では、主イエスが様々な奇跡を行ったことが知れ渡っていましたから、主イエスを救い主だと思い期待している人々もいます。ですから、あのイエスが公然と神殿の境内で語っているのに誰も捕えようとしないのは、町の議員たちも、イエスという男がメシア、救い主だと思い始めたということかもしれない、と彼らは憶測したのです。しかし、その人々は続けてこうも言っています。「**しかし、わたしたちは、この人がどこの出身かを知っている。メシアが来られるときは、どこから来られるのか、だれも知らないはずだ**」。ひょっとして議員たちもイエスはメシアだと認めたのかもしれないと思った彼らですが、すぐに、「いやいやそんなことはあり得ない」と自分の思いを打ち消したのです。イエスという男がメシアであるはずはない、なぜなら、救い主メシアが本当に来たのなら、そのメシアはどこから来たのかを誰も知らないような存在であるはずだから、と彼らは思ったのです。ここに、彼らが救い主メシアについて抱いているイメージ、あるいは期待している姿が示されています。メシアは、「どこから来られるのか、だれも知らない」、つまりどこそこの町の出身であるというような普通の人間とは違う、もっと神秘的な存在であってほしい、と願っていたのです。イエスの出身地はガリラヤであるということはみんなが知っていることです。そういうわけで、彼らが思い描いているメシアの姿とは違ったのです。当時のエルサレムの人々たちからしたら、ガリラヤは僻地です。ナザレはその中でもさらに無名な村です。ヨハネによる福音書の 1 章 46 節には「**ナザレから何か良いものが出るだろうか**」という言葉があります。ガリラヤの、しかもナザレなどという村から、メシア、救い主が現れるはずはないという差別意識のようなものも彼らにはあり、やはりイエスと

いう男はメシアではあり得ない、と彼らは思ったのです。メシアが来られるときはそのように人々の間に動揺が起こり、決して一斉にその御前にひれ伏すという状況にはならないということを、ヨハネによる福音書の著者は鋭く見抜いているのです。しかし、私はそのような状況だからこそ、確かに救い主は来られたということを信じています。

最初に、ヨハネによる福音書にはいわゆるクリスマス物語がありません、と言いました。しかしこの箇所で、エルサレムの人々が主イエスの出身地について互いに語りあい、主イエスがそれを聞いて語られている 28 節と 29 節に記されている言葉、「あなたたちはわたしのことを知っており、また、どこの出身かも知っている。わたしは自分勝手に来たのではない。わたしをお遣わしになった方は真実であるが、あなたたちはその方を知らない。29 わたしはその方を知っている。わたしはその方のもとから来た者であり、その方がわたしをお遣わしになったのである。」という中に、クリスマスに向けての方向性が示されていることが見えてきます。主なる神様がその独り子をお与え下さり私たちにお遣わしになったこと、そして、そのお方は「肉となって、わたしたちの間に宿られた。」（ヨハネによる福音書 1 章 14 節）ほどに、私たちと共に歩んでくださっていることを信じつつクリスマスを待ち望みたいと願います。